
I S・真の決闘者の闘い

ハッスル〇〇〇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS・真の決闘者の闘い

【NZコード】

N5836X

【作者名】

ハッスル000

【あらすじ】

闘い儀を終えて数ヶ月後、デュエルに伸び悩んでいた城之内克也は道を歩いていると一枚のカードを拾う。そしてカードから放たれた光に飲み込まれた城之内の行き着いた先は女尊男碑の世界だった。

これは遊 戯 王とインフィニット・ストラトスのクロスオーバーです。

0 ターニングポイント（前書き）

前回までは間違えて消去してしまったため、内容を元に戻し、加筆修正して再投稿です。

0 ターニングポイント

「」は童実野町のとある公園。そこには一人の決闘者^{デュエリスト}が決闘を繰り広げていた。

「真紅眼の黒竜でダイレクトアタック！黒炎弾！」

「うわー！」

デュエリストの命令に従い真紅の燃えるような赤い眼に磨き鍛えられたダイヤモンドの様な光沢を放つ黒い体を持った伝説種の黒竜が口から火球を吐き出し、相手に着弾して火柱を上げる。

「うっしゃー！俺の勝ちだな！」

彼の名は城之内克也。童実野町に在住するデュエリストだ。そしてそんな彼と共に勝利の雄叫びを上げるのは真紅眼の黒竜。城之内克也の誇る切り札である。

闘いの儀を見届け一ヶ月。城之内は相も変わらずデュエルに明け暮れていた。

彼は幾つものデュエルを終えると公園のベンチに腰を下ろす。その顔はデュエルの時とは違い、思い悩んでいる顔だった。

「（違う…何かが違うんだ…こんなデュエル繰り返したってなんにも変わりやしない）」

城之内はデッキを装填した決闘盤に手を落とし、溜め息を吐く。

城之内は伸び悩んでいた。いくらデュエルをしても強くなつた感覺を得ないので。

「（いんなんじゅ アテムに… いや遊戯に追い付けない）」

城之内は自分より先に居る今は亡き友の顔と、変わり、自分を変えてくれた友の顔を思い出す。

「（アイツらに追い付かねーと…俺のデッキに示しがつかねー）」

城之内は自分のデッキをディスクから取りだし手の中で広げる。そこには城之内の戦友たちが描かれたカードがいた。

そして城之内は一枚のカードを取り出す。

「（レッドアイズ…俺はどうしたら良いんだよ…）」

城之内は自信のエースに問う。しかしレッドアイズと云ふぞカードでしかないレッドアイズから言葉は返つてこなかつた。

城之内はあの後、兎に角デュエルをしようと考へ無我夢中でデュエルをしていた。そして気が付けば口は落ちきつており、街の街灯が輝きだしていた。

「やつべー、遅くなつちまつたかな」

城之内は『ユエルティスク』を着けたままの腕を振りながら走つていた。

「（結局変わんなかったな…）」

城之内はどうしたら良いものか考えながら走つてみると草むらの中にカードを発見した。

「ん。カードか？」

城之内はコターンで草むらまで走り、カードを取り出す。

しかし

「なんだこりゃ？白紙じゃねーか？」

城之内が拾い上げたカードには本来有るべき絵はなくただの白紙だった。

「（なんだよ。得したと思ったのに）」

城之内は拾い上げたカードをブラブリさせながら立ち上がる。

すると突然白紙だったカードが震え出す。それと同調したかのように城之内のテッキも震え出す。

「な、なんだ？」

すると手に持つたカードから城之内を食い殺す程の光が放たれた。

「う、うわー！」

城之内を食い殺した光が収まつた所には城之内克也は居なかつた。

1 違つ世界の暴君教師（前書き）

私の中では千冬様は最強だと信じています。それに城之内にチートなんて似合いませんし、彼は誰かに弄られてこそだと思います。ですので千冬様の性格が原作とは少し違うかもしません。

1 違つ世界の暴君教師

おかしい。今の俺の状況は正しくそれだと思つ。

頭が悪い俺にはこの状況に対する例えも、ましては答えなんて見つからない。

今までだつて非現実には馴れていると言つ自負はある。闇の決闘、臨死体験、魂の封印、3000年前のエジプトにタイムスリップ、今思えば懐かしい。しかし駄目だ。俺にはわからない。理解したくもない。

何だつて……俺は……！

「捕まつてんだよーーーーーーーー（泣）」

「マジでわかんねー…

事の始まりは簡単。

あの光に飲み込まれた城之内は田を醒ましたらそこは土の敷き詰められたグラウンドだった。

城之内は訳が分からず呆然としていると

ガシャン！ガシャン！ガシャン！ガシャン！ ガチャ × 4

急に空から降つてきたおかしな鎧を纏つた女性に包围＆捕獲と実に1秒が刹那に感じるスピードで城之内は捕獲された。

そして状況が飲み込めない城之内が突つ伏している間に後ろから手錠 + 首筋に手刀をプレゼント。格闘アニメ顔負けの早業で気絶した城之内は速やかに連行されるのだった。

そして起きた城之内を待っていたのは黒いスーツを着た女性。艶のあると言うのか兎に角女性特有のきめ細かい黒髪に、威圧感を感じさせるがそれを踏まえても整った顔立ちに大人特有の色香を感じさせる。

城之内は思わず見とれてしまう。しかしその後待っていたのは容赦と仁義なき取り調べ。侵入目的から始まり、名前、生年月日、血液型、住所、電話番号、家庭環境、家族の名前、仕事かアルバイト経験、勤務場所の連絡先。どうでもよさそうな情報も全て掘り起こされた。城之内も意味不明な状況だったので考えがまとまらなかつたのと女性、織村千冬（名前を話した時に教えて貰つた）の放つ百獣の王のオーラに城之内も逆らえずありのままを話した。

そしたら意外にもこの織村千冬と人物は話しさ聞いてくれる人で、城之内の話しさ口を挟まず聞いてくれた。

そして城之内もありのまま全てを話した。カードを拾い、気がついたらここにいたことも。普通の人物なら妄言だとバツサリ斬るだろうが織村千冬は城之内の話を最後までちゃんと聞き、確認してくると言い部屋を出た。

そしてやつと状況を理解した城之内の叫びが冒頭のそれだ。

なんだよこの状況！俺がなにしたんだよ！千冬さんみたいな美人に会えたのは幸せだけどそれ以外は不幸以外なんでもねーよ！

「あー…なんなんだよマジで…」

俺は鼠色の天井に問いただす。しかし天井に、ましてや鼠色の天井には無理があつたか、答えは返つてこない。ドチクショウ！

俺は天井よろしく鼠色の机に頭を叩き込む。人間追い詰められたら意味不明な行動を取つたり、電波を受信するらしい……邪神井う…・AGO…作画ほ…どうやら受信したらしい。この頭突きも意味不明な行動の一種だ。取り合えず夢覚める。の意味を込めた。

結果。痛くて顔が上がらない。

つーか冗談抜きで痛い！海馬のキャリーアタックや本田のパンチより痛い！

俺は額を擦りながら起き上がり机を見る。そこには鼠色なのにデュエルディスク以上の硬度をもつた机がある。メタリックな色より鼠色のが硬いのか！いいのかKC！机に強度負けてるぞ。

「思つてたより元気だな。飯を持ってきてやつたぞ」

「飯！」

正直状況飲み込んだら腹が減ってきてたんだ。
人は違うね（キラ）お礼に俺のモノマネを
流石千冬さん。 美

「モノマネなぞいらん。せつせと食え」

「へーい、そうですよ、エエエエエ！なんで俺の考えてることが！」

「讀心術だ」

獨身術？

ハギヤ！！

ちつとふざけただけなのに顔面を机にドッキングされた。
色は傷付かず俺は顔面陥没のピンチ到来！！

「汚れが付いたか」

パンパンと千冬さんが手を合わせて叩く。その音も心なしか綺麗に聞こえるのは千冬さんが美人だからだろう。美人は何しても映えるからな。

「反省が足りんか？」

「すんませーん…マジでチヨーシーしてすんませんでした…！」

机にダイブして謝る。だからそのパキパキ鳴らした手をしまってく

ださい。

「はあ、取り合へず食べ」

千冬さんは机の脇の台座に乗せていたお盆から味噌汁と白米に漬け物を出す。白米の鱗の海苔が良いアクセントだ。これは日本人の和食の陣。日本人として愛するべき和食の基本形態にして究極の構えだ。これを出してくれるなんて…

「いただきます…」

俺はお手手のシワを重ねて頭を下げる。千冬さんもつとづんと頷いていた。

先ずは白米のお椀を左手に持ち右手に箸を持ち一口。

「うめーー！」

俺は味噌汁に手を伸ばした。

至高の和食タイムも終わり今は千冬さんとの尋問タイム。どんなことを聞かれるかびくついていたが千冬さんの第一声は尋問ではなく、確認だった。

「城之内克也。16歳。1月25日生まれ、水瓶座に血液型はB型、家族構成は父と一人暮らしで母は離婚、妹は母の元で暮らしている。これに嘘偽りはないな？」

「お、おひ」

「そひか…」

千冬さんは溜め息を吐き俺を見る。

「いいか城之内。落ち着いて聞け。命令だ」

「は、はい」

「うわー、見事に脅迫紛いな命令だ。俺の意見は全面的に無視な方向らし!」

「なら単刀直入に言おひ。調べたところ城之内克也と呼ばれる人物の戸籍及び童実野町と呼ばれる町も存在していない」

・・・・はい?

「へえ? こには地球なんすよね? 童実野町がない? まさか…」

「信じがたいが『異世界』みたいだな」

千冬さんは俺が否定したかつた事実を喉元に突きつけた。

「さて落ち着いけ城之内。冷静さを失つたら何かが変わるわけでは

ない。人間諦めが肝心だ

「いや、冷静でいろいろて結構無理があると困つただけどーーー。」

「いや、可能だ。先ずは口を閉じて鼻を塞げ。そのまま眠るよつて目を閉じれば思考も冷たくなるだらう。」

「それ思考だけじゃなくて体！ボディも冷たくなるだらー。」

「こつそつ冷たくなればいいだらう。何も考えなくてすむぞ」

「嫌々！違うだろーー！俺はこれからどうなるんすか？ずっとこりんまん拘束ってわけじゃないすよね？」

「なんだ拘束されてたいとは… とんだダメだな」

「俺はダメじゃねーーーノーマルだ！」

「さてお前の処遇だが…」

「話が戻つた！？まあそれを望んでたわけなんだけど…」

「東京湾にコンクリで詰めて沈めることに決ました」

「理解不能！？意味不明」

「理由は私からの必死の演説のお陰だ。解放。生温いと

「あんたが原因かああああああーーー！」

「違う。了承した上の責任だ」

「元はあんたのせいだろ？があああああ…！」

俺はチタン机に乗り掛かる形で千冬さんに一喝する。

「まあ、冗談は終わりにして本題に移るか

「はじめっからお願ひします！」

千冬さんは「せつかちな」とかいいながら足元に手を伸ばす。せつかちになつたのはあんたのせいです。

「これがお前の処遇だ」

千冬さんは一枚の紙とカードを差し出してきた。

「なんすかこれ？紙に…カード？」

俺は紙を持ち上げる。そしたら紙の右上の文字に目が行つた。

編入届け

「……はい？」

「なんだ編入届けすら知らんのか？余程のバカなんだな

「ちげーよ！なんで編入届けがあんだよ！？」

「それはここが学校だからだ。T.S学園。この世界じゃかなり有名

だ

まあ、異世界から来たお前は知らないか。トト多さんはじめんじくせ
そうに呟く。

「HIS学園とはHIS、通称インフィニット・ストラタスと呼ばれる
パワードスーツの操縦者を育成する学園だ」

「インフィニット…ストラタス…？」

「元は宇宙での活動を目的に開発されたらしいが結局その計画は頓
挫したものだ。人間一度作った自信作は用途は違えど自慢したくな
るのだろう」

「へ、へえ？」

「詳しい話しさせん。だるいからな」

「はああああ…教えてくださいよ」

「まあ、重要なことは教えてやる。感謝しろ。地に伏せろ」

「酷い…」

「ハハ…なんで異世界に来て早々こんな事…」

「では話すぞ。まずこの世界はお前の居た世界と風潮が違つ。この
世界ではな男性より女性のほうが偉いらしい」

「女性のが偉い？」

「ああ、理由はHSにある。HSは原因はわからんが何故か女性にしか扱えんのだ。そしてHSには兵器としてあまりに高すぎる性能を有している。軍用基地すらHSの前にはただの鳥合の集だらうな。そんなんだから世の中の女性は男性より自分達のほうが強いと考えたのだ。これが女尊男碑の始まりだ」

「……半分も分からなかつたが大丈夫だ。いけむ」

「そりが、なら続けよう。そんなこんだで世界は見事に女尊男碑の世界になつてしまつたわけだ。しかし最近それに風穴らしき物が空いた」

「風穴？」

「男性のHS適合者が発見されたのだ」

「えつー・千冬やさわしきHSは女にしか使えねーって…」

「だからこそ風穴を開けるのだ。今まで女性にしか使えなかつた力を使える男。世界はこれを放つておくほどバカではないからな。それは今はこのHS学園にいる」

びっくりだぜ。あんまわかんねーけど…

「まあこなんどこりだ。お前の処遇の話しへ入るぞ。異論は認めん」

「は、はあ…」

「お前の処遇はHS学園への編入だ」

「は？」

「ういや……でもだつて……」

「HS学園つて男は入れないんじや？」

「そんなことはない。HS学園に入る条件はHS適合者かどうかだけだ。例え男だろうがHS適合者なら通学資格はある」

「へ、だけど男はHSは使えない……」

俺が言い切る前に千冬さんは俺に突き出した一枚のカードと懐からカードの束……つてそれは……！」

「貴様のデッキだろ。良かつたな貴様はこれのお陰で助かつたんだ」

「俺が……デッキに助けられた……？」

「そこ」に白紙のカードがあるだろ。そこには検査の結果HSだと書つことが判明した

「これがHS……」

俺は白紙のカードをつかみとる。それは俺にはただのカードにしか見えない。

「そのカードの結果の過程で同一の素材で出来た貴様のデッキを検査させて貰った。案の定このデッキはそのカードと共に鳴した」

「……」

話はカツ跳んでて分からねえけど…

「千冬さん…俺の『テック』を返してください」

「…ほひ」

俺のマジな雰囲気を察してくれたのか『テック』は返ってきた。

「…」

俺は『テック』の中に白紙のカードを入れ込む。

その瞬間はあまりに衝撃的だった。自分の体を包んでいく光の感覚。それがあまりにもリアルだった。

光が収まるところは

「やはりな…これで晴れて『HS』学園の生徒だな城之内

HSを身に纏つた俺がいた。

1 違つ世界の暴君教師（後書き）

次回は鈍感バカとの出会いです。爆発すればいいのに。城之内のI-S紹介はその後だと思います。ちなみに最近銀河竜軸のフォトンデッキを組みました。トラップスタンとフォトンケルベロス3積みしたらトラップが恐くない！そしてアシットゴーレム？エクシーズギフト？強制転移の流れが強すぎる。カイトデッキのコンボです。エクシーズギフトは基本エクシーズを多用するカイトデッキ必須のドローソースです。ジェムパに使えば損害ゼロですしね。そして意地でチューナはゼロのエクストラエクシーズ縛りです。サイドにはバルブ君とゾンビが控えています。流石にゴーズ無しは口マンがあるけど弱すぎる。ゴーズならうまくいけば銀河が出せますし。サイドラは3積み安定。カイトの使ったナンバーズはゴーレムしかエクストラに入れてません。あいつら雑魚だもん。

2 友達と決闘の約束（前書き）

展開早いかな…

2 友達と決闘の約束

突き刺さる好奇心な視線と言う槍が俺を貫く。その幻想はかなりリアルだった。何たってクラスの全員から注がれているからだ。このままで俺は式号機よろしく槍に串刺し決定だ。つーか現在進行形：だっだけな？

くそ…いくら城之内をまだからつてこの空氣は無理だ。動物園の動物達の気持ちがよくわかる。あいつらも苦労してんだよな…

そう言えば山田先生の胸でかかったな。杏子や舞とは違つてふんわりした雰囲気があつて素直に赤面できる。柔らかそうだ。

「よし戻つてこい城之内。後2秒で戻つて来なかつたら殺す」

「ラージャー……」

「ンマ2秒、刹那の反応だ。

「それでは改めて編入生の紹介だ。コイツも織村の後に発見された男性適合者だ。別に仲良くする必要はない」

「……はい……」

「いやいやおかしいおかしい……何満場一致で無視決定してんの。つーか息ピッタリ過ぎだろ……」

「！」のよつて織村と同クラスのバカだ

「あんた酷くね……」

スパーーン!!

閃光一閃、光の早さで降られた出席簿が俺の頭を貫く。つーかなんでこの人の出席簿はこんなにいてーんだよ!

「だれがあんただ。織村様と呼べ

「先生じゃねーのかよ……」

スパーーン!

ダァイニダア!!

「様と呼べと言つたらうつが……」

「マジなのかよ…」

「失礼な、私は冗談は言わん!」

「もうやだあーーー!」

「うう…何だって俺がこんな田に…

おれが教壇の上でこの世に対する怒りに支配をされていたら田の前の男子と田があった。そいつの田は俺に対する理解と同情の念が籠められていた。

「(分かるよ)」

「……ありがとう……ほんとうに……ありがとう……」

俺達は会話をすることなく友達になつた。

「……………」

あれから地獄の自己紹介を終えた俺は優しい優しい女神、山田先生に言わせて空いていた席に座り、昨日渡された教科書片手に授業を受けて

... z z z ...

ませんでした。

だーでー、ここに書いてある」と一切理解出来ないし、昨日この世界に来たばかりの俺にどうしろと?だから寝るのや。はははwww

「起きんか愚か者！」

「スパーーん！」と本日3回目の千冬様からの有り難き愛の鞭が俺の頭な
炸裂する。千冬様も照れ隠しがうまいことで。

ズガアアアアーン！！

頭が教科書にめり込まされたあああ！しかも出席簿じやなくて素手

だああああ！

「わへ、山田先生。授業を続けてくれ」

「あの……城之内君は……生きてますか？」

「マイシの生命力はゴキブリのそれと同じだ。心配するな」

「だれがゴキブリだああああ！」

山田先生 + 全生徒 「「生きてた！」」

「勝手に」「ーるーすーなああああ！」

城之内は早速クラスに馴染みきついていた。

「もうやだ……生きるのに疲れた……」

俺はあれから千冬様からの有り難き説教を廊下で受けた羽目になつた。なんでだよ……俺はただボケに向けてツツツツミをしただけなのに……

「大変だったな。えーと……城内でよかつたか？」

「ん？」

俺は頭を上げる。そこにはこの教室で始めてできた友達だった。

「ああ、城之内で良いぜ。お前の名前は？」

「俺は織村一夏。千冬姉の弟だよ」

「え？ 今なんて？」

「まあ、仕方ない反応だよな…」

一夏は頭を押さえて考え始める。

「その…『ごめんな』。千冬姉のせいで迷惑かけちまつたみたいでよ」

「いや、別に大丈夫だが…」

一応、千冬様は俺の命の恩人？ にあたるわけだし、こいつに来てからは千冬様に頼りっぱなしだ。

「それなら良いんだ。同じ男の一人適合者として仲良くしていこうぜ」

「だな。よろしくな一夏」

「よろしくな城之内

俺と一夏は握手した。

すると一夏は何かを思い付いた様な顔になつた。

「んじゃ俺の友達を紹介しないとな。話し相手は居た方が良いだろ

「ああ、ダチが増えるのは大歓迎だぜ！」

「ならな…篠、セシリ亞。ちょっと来てくれ」

一夏の収集に一人の女子がやって来た。

「なんだ一夏。私に何か用か？」

「何なんですの？」

やつて来たのはこれまた美少女だった。千冬様といい一夏の周りの女子のレベルは凄まじく高いな。

「紹介するよ。黒髪のリボン着けてんのが篠ノ乃篠。俺の幼馴染みで、金髪の髪を巻いてんのがセシリ亞・オルコットだ」

「むつ、編入生か」

「一夏さん。これはどうこうことですの？」

「だつて城之内編入したばつかで仕方ないけど友達が俺しかいないのはなんか嫌だろ。だからお前らも城之内の友達になつてやって欲しいんだ」

確かにこの男子一人の環境で友達作りは辛い。何て言つた肩身が狭くて動けない感じだ。

「まあ、しかしなんといつか…柄が悪いと言つた…」

「不良は卒業してゐるつかの」

「女尊男卑についてどうお考えですか?」

「はあ?」

セシリ亞さんだつたけな?突然真剣な顔で聴いてきた。なんと書つか真剣に答えないといけない雰囲気だな…

「別に…同じ人間なんだし仲良くなりや良いのにな…て思ったけど…」

「では女性が憎いですか?ISが使えるだけで権力を振る舞う女性が」

「あ、おこセシリ亞…」

「一夏さん。すいませんが邪魔しないで下さい。わたくしはどいつも聞いておきたいのです」

「憎いって…別に考えたこと無いけどな…確かに権力使ってふんぞり返るのはムカつくはムカつくけど…憎いなんて考えないな」

「……分かりましたわ。失礼な物言いで悪かったと思ひます」

セシリ亞は一礼して去つていた。

「いつたいなんだつたんだ?」

「あ…城之内、セシリ亞を悪く思わないでくんないか?アイツは

男が基本的に信用できないんだ。ほら、女尊男碑になつてから女尊男碑反対のテロ活動してる男達とかいるじゃんか。あれが嫌いなんだと

「そうこうとかよ。トランーことある奴等も居るんだな」

それは男嫌いになつても無理無いな。正直俺もそんな男とは友達になんかなりたくねーしな。

「これは是が非でもセシリアとダチになりてーな。あの様子じゃまだ心許された訳じゃ無さげだしな」

「ああ、頼むよ城之内。セシリアの友達になつてやつてくれ

「…じつやり一本筋は通つているらしいな」

「俺と一夏が握手してたら今まで黙つていた篠ノ乃が突然口を開いた。

「正直友達云々は迷つていたが貴様みたいな奴は嫌いではない。私も友達になつてくれ」

「お、おひ。よろしくな篠ノ乃」

「そしてセシリ亞とも友達になつてくれ。あれとは…その…」

篠ノ乃是頬を赤らめながら「ゴーゴー」し始めた。なんとも愛らしい姿だ」と。

「…ライバルだから…な…」

なるほど

「確かにライバルなら放つておけないよな。まかせなー男、城之内克也！必ずセシリ亞と友達になつてやるぜー！」

俺は急いで教室を飛び出した。外には群がっていた女子が居たが無理矢理通してもらつ。

そのまま廊下を全力疾走。出し惜しみはせず一気にトップスピードまでギアを上げる。

そして廊下の角を曲がった辺りであつさりとセシリ亞は見つかった。お互い目を見合つて動けない。俺もこの瞬間普段は働くかない脳細胞が動いた。

俺はここに来るとき、セシリ亞にデュエルを挑むつもりだった。なんたつて今まで俺はデュエルで人との意志疎通を図つていた。しかし今は異世界。デュエルが總てじゃないんだ。

ヤバイ……言葉が詰まつた。

えーと……えーと……

「俺と闘えセシリ亞！……」

俺は気づけばセシリ亞に指を指していた。

「……」

「HISで勝負だ！！俺が勝つたら俺を信頼して貰ひやせー。」

「……良いですわよ。時間と場所は

「今から千冬様に土下座していくつからーその後にジドュエルだーいいなー！」

俺は急いで千冬様に会つたために再びトップギアで走る。

何処ですか千冬様ーーー！

「おかしな方ですわ

セシリ亞の残した言葉は城之内には届かなかつた。

2 友達と決闘の約束（後書き）

次回が次次回で城之内・セシリ亞です。

3 弟子入りと奴隸確定（前書き）

千冬様と城之内の絡みは書いてて楽しすぎる。

3 弟子入りと奴隸確定

「オルコ芝トと勝負をせてほしげだと？」

セシリ亞と決闘の約束をした俺は急いで千冬様を探しだし早速土下座して決闘の申請を出していた。

「はいー・セシリ亞と闘いたいんです。お願ひしますー。」

「ふむ……理由はなんだ。答える」

「はい。ダチになりたいからです」

「ダチ……？何故闘つたら、ダチになれるんだ？」

「俺、城之内克也を認めてやらせたいからです。城之内克也なら信頼できるつて、友達になれるつて……」

「なるほどな……だが言わせて貰えればオルコ芝トは強いぞ。少なくとも今のお前では勝ち目はないだ。それでもやるか？」

千冬様の視線は正直怖かった。だが俺は逃げるわけにはいかない。絶対ダチになつてみせる。

「はいー。」

「……良いだろ？……明後日に丁度グラウンドでの模擬戦を行つ。そこで闘わせてやるか？」

「あ、ありがとうござりますーー！」

俺は勢いよく頭を下げる。難関はクリアした。後は頑張るだけだ！

「だが…」

「？」

「へ？まさか条件付きますか…靴を舐めるとー」

「いや、靴を舐めたら汚れるからいい。決闘と言つても授業だ。織村の時は授業ではなかつたためあまり教えなかつたが…あまりボコボコにされても授業にならん。城之内。貴様には私が直々に稽古してやるわ！」

「は…マジですか…？」

聞き間違いでなければ今千冬様から直々に稽古を受けさせてくれる

「ああ、どうだ？私から稽古を受ければ貴様はある程度オルコギトと張り合つ程度には戦えるようになると誓つてやるわ。私の稽古、受けれるか？」

「これは…とてもないチャンスなんでは無いのだろうか…正直俺には飛行方法すら分からぬ。これを受ければ俺は…セシリ亞に勝てる…

「はいーお願いしますーー！」

「なら確認だ。貴様はこれから私の弟子…いや奴隸だ。私が右と言

つたら右を向き、私が左と言つたら左を向き、私がYESと言えばYESと答える。そんな覚悟があるか？」

「ありますー俺には手段を選べる程余裕はねーからなー！」

即答した。千冬様の作った逃げ道になんか入らない。俺は絶対セシリ亞とダチになるんだ。そのためならどんなことだつてやってやる。

「ふつ…良いだらう城之内…放課後にここに第5アリーナに来い…勿論ギャラリーは無しだ。口外もオルコットとの闘いが終わるまでは厳禁だ。いいな！」

「つすーーー！」

待つてろよセシリ亞。テーマの居る場所まで絶対追い付いてやっからな

「あ、最後に」

「へ？」

「私は弟子をとつたことがない。死んでも文句は言つた。良かつたな異世界で」

実際に滲刺とした顔でえらい物騒なことが聞こえたんすけどーえ？死？

「ちよー千冬様！ タンマを要求します」

「おかしいな。貴様はもつ私の奴隸で私は貴様に発言権を許した覚えはないが。城之内」

「チクショー！」

後悔しないと決めて1分立たずに後悔した。けつして俺の意思が弱いわけではない！絶対だ！

さて、千冬様のどれ…弟子になるのが決定した俺は早速授業にせいを出していた。

正直言つている内容はちんぶんかんぶんだが千冬様からのお達しだ。俺に拒否権は存在しない。

これもセシリアのダチになるためだと割り切れるし、一夏も授業は眞面目に受けてるぽいからな、俺も精一杯頑張るわ。

そして昼休み。一夏と篠ノ乃に昼飯に誘われたが断った。セシリアとダチになつてから行くと言つて俺は千冬様の居る職員室に來いた。

「座れ

シユバ！！

「さて、呼んだのは他でもない。貴様には時間が無いからな。荒療治だ」

「荒療治？」

「そうだ。貴様は織村以上にHSに対する知識が不足している。よつて今から……」

ドスン！…という擬音が聽こえる程に分厚い辞書みたいなもんが置かれた。

「あの…これは…？」

「貴様にはこれを詰め込む。これを詰め込めば知識不足にはならん

「これ…」

俺の目の前に置かれた辞書？は推定だが… 1000ページ以上ある。

「そ、詰め込むか」

千冬様は立ち上がり俺の顔を掴む。何するつもりなんだ！

「安心しろ。少し詰めるだけだ」

「詰めるって何を！教えてください！」

「知識だ。面白そつだらつ。実は新開発の記憶術があるんだがな」

「ふんふん」

「計算結果からこれを使用した者は2日で衰弱死してしまうらしい。しかしここには無駄に精神力と生命力を持つたモルモットがいるで

はないか」

そんな…確かに俺は臨死体験を一回ぐらい経験しますが…

「そ、うら… カ・ケ・ゴ・ヲ・キ・メ・ロ・」

」
・
・
・
・
」

この後授業、城之内は生ける屍と化していた。

俺が目を醒ましたのは授業終了のチャイムがなるのと同時だつた。記憶には先ほどの記憶術によつて詰め込まれた記憶の数々だ。どんな方法だつたか聞かないでくれ。

「恐ろしい…」

「大丈夫か城之内！？意識が戻ったんだな！」

「一夏か？」

「どうやら新しいダチは俺の心配をしてくれたらしい。

「お前がうわ言で前世の罪を懺悔し出した時は諦めかけたがな」

「俺そんなヤバイことになつてたの！」

前世の罪って…何なんだ！俺は何を懺悔してたんだ！！確かにデッ
トゾーンに足突っ込んでたらしいが今はこっちが気になる！

「俺は何を懺悔してたんだ！教えてくれ！篠ノ乃！」

「えーと、確か…「俺は凡骨です。認めきれなくてすいません」だ
ったかな？」

「前世の俺！」

悔しい…俺は前世でも凡骨呼ばわりされてんのかよ…後認めるなよ
！！

「やう言えばもう放課後だよな

「ああ、千冬姉に城之内を起こすよつて頼まれたんだ」

「そつなのか…迷惑かけちまつたな」

あー、これから俺は生きて帰られるのかな…

「んじゃ、また明日な一夏、篠ノ乃」

「ああ、またな」

俺は一夏と篠ノ乃と別れて千冬様が言つていた第5アリーナに急いで。

さて、アリーナについた俺を待つっていたのは出席簿と…大剣片手に佇む千冬様だった。

「遅いぞ城之内…いや奴隸」

「くつ…すいませんでした。あの記憶術の影響で二途の川を散歩してましたんで」

「なるほど、それでは始めるか…城之内ここ直れ」

千冬様は背後に用意していたホワイトボードを前に出した。俺はそれを見上げる形で見る。

「さて、先ずは貴様にエス戦闘においてのポイントを把握させなくてはな」

千冬様はマジックペンでホワイトボードに文字を書いていく。

「ISの戦闘に勝つためのポイントは全部で3つだ。先ず1つ目はシールドエネルギーの残量調整。ISはシールドエネルギーが切れた敗けだ。そして攻撃や防御にもシールドエネルギーは使用される。よつてシールドエネルギーの管理は重要になる。シールドエネルギーの残量を見ながら戦闘スタイルを変えることも重要だ」

千冬様はホワイトボードにペンを走らせた。

「例えば、貴様が近接型のISを使う場合は残量の多い内は怒涛の攻めで相手のシールドエネルギーを消費させ、暴れてシールドエネルギーが心元くなつた場合は後手に回り相手の隙を突く。など近接型としてもシールドエネルギーの残量で闘い方はガラリと変わる」

「なるほど……」

「次は相手の癖の把握だ。これはISと行かなくとも全スポーツ及び競技に必要な要素だ。闘いにおいて情報は出来る限り多いに越したことはない。情報収集も闘いの一環と言つても過言ではない」

「確かに……」

「デュエルにおいても情報はかなり有利に働く。手札確認なんかされたら戦術は筒抜けだ。」

「そういうことだ。そして最後は……」

千冬様はホワイトボードに書くのを止めてこっちを向かれた。

「一步を踏み出す覚悟だ。大事な場面や仲間が危機に陥ってしまっている場面で自分の意思を突き通す覚悟。これを持ち得ない奴に真の強さは手に入らん」

「・・・」

「城之内。貴様にはその覚悟があるか？恐怖に立ち向かい闘つ覚悟が、誰かを守るために闘つ覚悟があるのか？」

この質問には…

「へへ… その質問はおかしいですよ千冬様」

「？」

「俺は大切な何かを守るために力が欲しいんだ。俺の大切な仲間を守るために力がいるんだ。俺は最初からそれ以外の力を望んでませんよ」

それ以外の力を力と呼びたくない。俺は今までの俺を否定する気なんてサラサラない。

「そうか… どうやらお前のその点だけは評価しなければならないらしいな」

千冬様は満足そうに息を吐いた。俺はと言いますと千冬様に認めて貰えたことに対する喜びに体を奮わせてしまっていた。だってあの千冬様だぜ。暴虐非道教師の千冬様に認めて貰えたんだ。喜ばないはずない。

「それでは早速始めるか。城之内。ISを起動せろ」

「おひー！起動しろー『デュエルモンスターズ』」

俺は白紙のカードから生まれた腕輪型のISを起動させる。

そこには真っ白のボディ、それ以外に特徴が一切ないISがあつた。

「いつ見ても思うが、本当に特徴がないな。しかも性能は第2世代型のIS以下。雑魚中の雑魚だな」

「あんまりばつさう言わないでください！」

「うう…俺だって泣きてーよ！専用機って言つたら少しさは何か特徴があつて良いと思うんだが俺のISは一切ない。皆さんの思い描く普通の体現みたいな姿だ。

「しかし貴様のが専用機であるならまだ進化の可能性がある」

「進化の可能性？」

「ああ、ISには段階があり、初期形態、第1形態、第2形態の順番に進化をするのだ。貴様はまだ起動させて日が浅い、もしかしたらまだ初期形態なのかもしけん」

「と、こう」とほ…かつ…よくなるんだな！」

「…まあ…その解釈で良いだろう。だがそろそろ第1形態になつてもおかしくは無いのだがな」

「へ？」

「大体初期形態から第1形態までの進化には時間はかかる。そして第2形態への移行はそれぞれで不規則なんだ。まあ、フリー・ザ様みたいにポンと進化できる訳ではない」

そ、そんなへ、上げて落とされた気分だ…

「しかし… そうだな… 城之内。 HISの内部を解析しろ」

「HISを… 解析？」

「データを閲覧しろと言つているんだ。もしかしたら何かあるやもしれんぞ」

「なるーー！」

そつと決まればフンフンと。

「何々？『情報閲覧拒否』…」

「どうだ城之内」

「『情報閲覧拒否』ですって…」

沈黙する俺と千冬様。俺もまさか不可なんて結果になるなんて予想してなかつた。

「HISにまで見捨てられるとは… 流石は凡骨だな」

「すいません。一人称は城之内でお願いします。でないとわりかし本気で泣きます」

「なんと…貴様の涙なんて流されたらアリーナにシミが着いてしまうではないか」

「泣くよ…本気で泣きますよ…」

田の下に溜まつてこるのは断じて涙ではない。これは汗だ。

「まあ…閲覧拒否など舐めたISだな。…壊すか」

「いやいやだからおかしい…」

「しかし情報が分からんのではこちらも戦略の立てようがない。今このこつは第2世代にも劣る程度だしな…」

千冬様は割と本気で指導してくれるらしい。正直安心した、だつて弄られて1日終了なんて「冗談にもならないヴィジョンが見えてたら…リアルに」。

「どんな馬の骨でISにすら棄てられた負け犬だろうが生徒なのは生徒なのだ。どんなに不本意であろうと全力を尽くさねばならないのが教師のジレンマだ」

「酷くね…ジレンマって何…俺の扱い酷くね…」

「大丈夫だ城之内…凡骨。私はスバルタが得意だからな。生徒の調教はお手の物だ」

「何で名前で言いかけて凡骨に変えるんだよーそれに俺はサークスの動物か何か！！」

「ふむ…ペットだな」

「ペット…つまりそれは…俺の人権は…

「奴隸兼ペット。お前は天性のドMだな」

「どつかの誰か様のせいだな！！」

前の世界の方がまだ扱いが良かつたぞ！海馬より毒舌な美人つてどうよーご褒び……いや！俺は断じてドMじゃない！あつてたまるか！

「まあ、眞面目な話貴様には今、道が2つある」

「道？」

「1つはそのまま性能が分からぬ機体の隠された力に期待して闘うか、それとも打鉄かラファエルで闘い、確実にじり貧になり負けるの2択だ」

それって

「先ず選択肢1では貴様は開始早々敗北する可能性がある。ネタバレになるがオルコットの機体には優秀な射撃武装が多い、今の貴様では避けられず被弾しまくり負ける。そして選択肢2なら負けるのは確定にしろ善戦は出来る。認めて貰いたいなら選択肢2が一番効果的だ」

つまり千冬様は俺に僅かな可能性に全部賭けるか、魅せるだけ魅せ

て負けるか、て言つ」とだ。

「悪いけど千冬様。俺はやるからこには勝つがモシードーなんすよ！それに諦めて魅せるなんてんなんめんぢくなくて器用なことバカな俺にはできませんよー。」

「ああ、もし選択肢2を選んだら殺してやれりと黙っていたが……やはり固いな。お前の信念は」

「よじー。試合までに間に合わないぞー。しつかり着いてー」
「は、はい！」

待つてろセシリア。絶対にダチになつてやるからな。それまで胡座でもかいて待つてやがれ！

3 弟子入りと奴隸確定（後書き）

次回はvssセシリアさんです。城之内のIISは雑魚中の雑魚です。

まあ…進化するんすけど…パイロットが凡骨じゃ…な…

下手いくと一夏より弱いすよ彼。

4 戦闘開始と決闘者の呪い（前書き）

今回はあまりチェックが出来てませんので間違いが多いこと思われます。指摘お願いします。

4 戦闘開始と決闘者の呪い

あれからまたに地獄と言つ比喩が正しい千冬様の虐め……特訓を肉体面も精神面共に奇跡的に生き延びた俺は後は試合を行うアリーナに入るだけだ。思えば長かった……セシリ亞とダチに成るために始めた特訓。休み時間の度に記憶を詰め込まれる地獄。一夏と簞からの心配の眼差し。セシリ亞からの挑発。俺は耐えてきた。鋼鉄の精神でそれらの試練に耐えてきた。今の俺には死角なんて存在しない。

「勝てる……！」

「どうした奴隸？遂に沸きに沸いた膿が漏れ出てきたか

「少し自分を勇気づけただけですよ……一々揚げ足を取らないで下さい！」

「そうか、それは悪かつたな。しかし凡骨奴隸」

「遂に融合した……！」

「凡骨奴隸つて……使えない奴じやん！

「凡骨の時点から使えん。凡骨なら凡骨りじく足搔くだけ足搔け。私はそれをお前に教えてきたのだからな」

「分かつてますよ。足搔くだけ足搔いて」

「勝てよ」

「わーてますよ」

俺としても千冬様の看板背負つている身なんでね。簡単に敗けるわけにもいかないし、何よりも敗ける気もない！」

するといパシトに山田先生からの通信が入る。

『城之内君。準備は出来てますか?』

「はいー。」

『なり出撃して下をこ。すでにオルコットさんも出撃してますよ』

あ…ついに来た。

「行つてこい奴隸」

千冬様も相変わらずの毒舌で俺を送り出す。弟子の初陣なんだ。もつと然るべき態度がある気がするが別に良いや。

俺はすでに起動させた『テュエルモンスターーズ』を纏いながらパシト排出口まで歩く。

「んじゃ、行つてきますわ千冬様

俺は千冬様に手を振る。千冬様に恥をかかせはしない。こんな出来な弟子ですが貴女を尊敬する気持ちはクラスの女子より上だと自信がある。

俺はペリット排出口に辿り着き腰を落とす。

「準備完了しました山田先生」

『分かりました。発射シークレンスを開始します』

さて、頑張りますか

そんな時、突然千冬様が口を開いた。

「ふむ…城之内」

「なんすか」

「…・・・」

「！？！」

俺はピリットから勢いよく飛び出した。

「行け、我が弟子」

俺の頬は最後にかけて貰った言葉ににやけぱなしだった。俺はあの人に弟子として認められたんだ。

俺が飛び出した先にはすでにセシリ亞が飛行していた。その飛行ひとつみて俺との格は明らかだ。流石は代表候補なだけはある。

「さて、先ずは逃げずに来たことを褒めて差し上げますわ」

うわー、早速嫌味から入られた。しかしそれは千冬様に奴隸奴隸、凡骨凡骨言われ続けてきた俺には通用しない。今の俺なら海馬の嫌味にだつて耐えられる。海馬の嫌味と千冬様の嫌味はレベルが違う。バカにするのではなく、精神にダイレクトアタックを決めてくるだ。

「そりかよ。こちどりお前とダチになるために頑張つてきたでな」

お前は『デュエルモンスターーズ』から実態剣を出現させる。西洋剣をモチーフにした両刃にEISの剣としてはやや小さめの刀身を持っている。

「あら、随分お粗末な剣ですわね」

「うつう…！」

くつー千冬様の教える一つの『怒りを静めて、静かに怒れ』を早々に破ることになつちました！すみません千冬様…

取り合えず深呼吸だ。怒りを静める。内心怒り心頭でもそれを静かに燃やすんだ…

「落ち着いたぜ」

「そうですか…なら踊りなさ「ハアアアアア…！」…？」

セシリ亞がお馴染みの台詞を吐くその瞬間

「ハアアアアア！！」

「なつ！？」

城之内は怒号を上げながら全速力でセシリ亞に突撃していた。

セシリ亞は初手から城之内に完璧にペースを握られてしまい反応が遅れる。

「オラアアアアー！…喰らいやがれえええ…！」

城之内は手に持った剣をセシリ亞にふりおろす。狙いはセシリ亞の肩口だ。

「くつ…」

しかしセシリ亞もギリギリ反応し城之内の奇襲を完全とは行かずともかわしてみせた。

「ちつ！…ハアア！」

城之内はそれでは終わらず噉みつかん勢いでセシリ亞の間合いに侵入する。

セシリ亞もそれに対抗せんと体勢を気にせずフルパワーでバックし城之内の間合いから脱出す。

「……」

城之内はそれを確認すると逆にセシリ亞から離れていった。さつきまでの勢いは完全に殺し、自分の技能と機体の性能では追撃は不可能と判断した。城之内は千冬からの指示を思い出していた。

『貴様が勝機を掴むには先ずは先手は絶対に取れ。これがどれなけば貴様は敗ける』

あれは弟子入り初日だった。千冬様は勝つために守らなければならぬことを教えてくれた。

『理由はオルコットのIISの特徴にある。あれのIISは遠距離からの射撃戦を得意としたIISだ。あれ自体の射撃センス悪くない。よつてIISとの相性も悪くはない、いや最高だ。』

みなさま聞いただろ？あの千冬様が人を褒めましたよ。セシリアを褒めますよ。明日は嵐か何かですか？

『だから勝機は先手だ。あれが射撃体勢を整える前に間合いを詰める。そして攻めろ』

『はいー。』

『そして一度詰めた間合いを離されたら後は逃げる。先手で決めなければ勝ち目は無い。一度逃がしてしまったならキツパリ諦める』

『な……なんですか？一度詰めたらなまた追え……』

『貴様のIISが第3世代並の性能があれば…な。しかし貴様のIISにあれを追いかけるのは不可能だ。根本的性能の違い過ぎる。バイクに自転車で挑むのと一緒にだな』

うわー…勝ち田〇じやん…そこまで違うもんなのか?

『普通の第2世代でも操縦者次第で追撃は可能だ。しかしここに居るのは唯の凡骨だけだ。勝つのは不可能だな』

もう一々凡骨に反応するのに疲れてきた…つか馴れたよ…

『しかし逃げるだけでは勝つのは不可能だ。これは自然の摂理だな…、敗けはしなくとも勝ちも無い。普通ならカウンター等を教えたいが生憎オルコットにカウンターは無意味だ。あれは近づいてこない』

『んじゃどうするんすか?俺は勝ちたいんすよ』

『貴様は忘れたか、元々この闘いの勝率は限り無くのだとこいつのを』

ぐつ、確かにそうだった…千冬様ならとか考えてた自分を叱咤する。

『私でも凡骨を短期間を急げ天才に勝たせるには時間が必要だ。しかし今は時間が無さすぎだ』

『うつ…確かに…てか凡骨は止めてください…』

そろそろ心が張り裂けそうす。主にあなた様の毒舌とか毒舌とか毒舌で。

『ふん、この程度の暴言に心が折れるとはな。凡骨の骨は極度にカルシウムが足りてないみたいだな。牛乳を飲め』

『カルシウムは足りますよーつーか俺の心は骨じゃねーしー!』

『当たり前だろ。貴様はバカか?いやバカに失礼か…』

『ドチグジョオオオ!…!』

俺は泣きながら両手を床に叩き付ける。弟子入り1日経たずに心が折れました。ポツキリと根本からポツキリ逝きました。

『まあ、話を戻すが、貴様が勝つにはその工の奇跡に賭けるしかない。これは決定事項だ』

『やつぱりそうよね……』

『まったく…貴様は一々一喜一憂が激しそぎる。弱音とは口にするだけで氣を弱める。言靈を知るものを口数を減らすものだ』

『言…靈?』

へ? なにそれ?

『それに弱音だけでなく怒りは戦闘においては爆発させるものではなく静めるものだ』

『だ、だけど怒ったほうが力が強いとも有るんじゃ?』

『武術を学ぶものは皆怒りを爆発させて、脳のリミッターを外し力を解放するタイプと、怒りを静めて、常に冷静に静かに闘うタイプと、2つの種類が存在する』

へ？武術？ISじゃないの？

『ISの最終的な勝敗は大抵は操縦者の力量だ。性能差等大して響かん』

『それなら『だが貴様のISは性能に差が有りすぎる』？あ…』

『そうだ。今のISは大体は第3世代が主流、あのバカ以外の専用機所持者は全員そうだ。そして同じ第3世代型のISに大した性能の違いは存在しない。よつて最終的には操縦者に勝敗が委ねられる。しかし貴様のISは普通は存在しない絶対的で覆ることの出来ない性能差が存在する。これはあまりに致命的だ』

『確かに…』

『そこで今からお前には静を会得して貰ひつ

『なんですか？俺自分で言つのも何ですけどかなり切れっぽいすよ

よ

『動は怒りを爆発させるために大体は攻めが基準の戦法に向いている。しかし貴様が怒りを爆発させても勝ちはない。だから冷静に回避に向いている静を会得して貰うんだ。これが会得出来ればある程度は回避出来る。そこで貴様にはこれから座禅を組んでもらう。さあ、組め』

『何故に座禅！？』

『座禅は精神を集中させるのに非常に便利だ。それにただ座つてもらつほどの暇は貴様にはない』

やつぱりただじや終わらない人だな…

『今から貴様には脳内で試合を行つてもいい。私が貴様の試合の内容を喋る。貴様はそれを脳内でシミュレートしろ』

『はい』

俺は座禅を組んで、頭の中を空にする作業に入った。

「（同じだ。あの座禅を組んでる時の無の感覚…）この自分で自分が静まる感覚…」この状態なら（）

俺は千冬様直伝の奥義？で薄皮一枚セシリ亞の攻撃を避けていた。大きく動かずセシリ亞を捉えながら最低限の動作で避けることでシールドエネルギーの節約になるし、セシリ亞が乱射してくれんならばんバイザイだ。

「（いけるー）」

この状態を維持できれば…まだ勝機がある

「ならば…行きなさい！ブルー・ティアーズ！」

突然セシリ亞は射撃を止めて、背中のユニットを放出した。

「（なんだ一体…）」

ミサイルか何か？

そんな考えを浮かべたのは放出されたユニットから青色の閃光が迸る直前だつた…

「なつー!?」

俺は手に持った剣で目の前のユニットから走った閃光を受け止めた。しかし俺の視角から抜け出していた3機のユニットからの攻撃は防げなかつた。

「何なんだ！」

俺は左手に常時装備された実体シールドを構え直しながら精一杯ユニットから距離を離そうとするが離れられない！

「くそつ…」

城之内は走る不規則な4本の閃光をシールドと剣を使いながら防ぐも、ブルー・ティアーズの性能は『デュエルモンスターZ』より上で死角への侵入を防げない。

「さあ、踊りなさい！」

「くつー…どうすりや…」

城之内は必死に奮闘。城之内のシールドエネルギーは徐々に削り取られていく。

「城之内…大丈夫なのか…」

俺は観客席から城之内の試合を眺めていた。序盤こそは奇襲でペースを握り、紙一重でセシリ亞の攻撃を避けていたが、セシリ亞のブルー・ティアーズのピット攻撃に対応しきれていない。

「第…城之内勝てつかな?」

「友が信用してやらんでどうする一夏。城之内を信用しよう」

「…だよな」

城之内、信用してるからな。だから絶対セシリ亞のダチになつてくれよ…

「どうしました。それでは私には勝てません」とよー…

「ぐつー…」

城之内はシールドに向かってくるビームを防ぐ。その度にシールドの表面は焼け焦げており、後僅かしかもたないのは城之内にも理解できた。

「（確かにこんまんまじや勝てね……）」

「ヤ！」ですわ！ブルー・ティアーズ！」

「しまつ…がああーー！」

城之内の一瞬の油断をセシリアは見逃さない。ブルー・ティアーズのオールレンジ攻撃により吹き飛ばされる。

そんな中、城之内は自らのHSの語りかける

「（頼む…答えてくれ…テッキよ…）」

また一つ被弾する。肩の装甲を抉られる。

「（お前は俺のテッキなんだろ…だったら力を貸してくれ…俺は…俺は…）」

次は太股の装甲が割れた。連鎖的に脛の装甲にヒビが走る

「（絶対に…俺に賭けてくれた一夏や箇、こんな俺に鬪い方を仕込んでくれた千冬様…みんなに支えられてここまで来た…だから…）」

「力を寄越せーー！」

『cards system 起動確認。データ照合。城之内克也と判断。コア、アームズ、ディフェンスの解放を認証』

城之内は光に包まれた。

『I'm...碧だ?』

何もない真っ黒な空間。俺はそんな場所にいた。

『なんなんだよ!...俺はさっきまでセシリアとE.Sで勝負をしていたはずだ。なのに』

そうだ。俺はさっきまでセシリアとE.Sで勝負をしていたはずだ。間違つてもこんな真っ暗な空間なんかではなかつた。

俺は訳が分からず辺りを漂う。

そんな時

『田覚めたか城之内...』

俺以外の声が響いた。

『なつ!誰だ!?』

俺は知らない声に怒鳴り付けるように聞いた。

『ふつ...そう言えば自己紹介がまだだったな。こうして会い見える機会も無かつたし、それに私はいつも貴様に話しかけていたが...い

かんせん貴様が無視するのでな』

『なつ？俺に話しかけていた？』

『ああ、私は貴様にいつも語りかけていた…しかし私の…私達の声はどう足搔いても貴様には届かんと諦めていたのだがな…どうしてチャンスが舞い込んできた。だから寄り代を求めていたISに同調して貴様と言葉を酌み交わすために。その賭けは成功した。こうして私達は貴様に間接的ながら言葉を交わすことが出来るようになつた。』

『意味わかんねーぞ!』

『やれやれ、凄腕の師に鍛えられても貴様は相変わらずバカなのだな…』

『なんで知らない奴にバカにされてんの俺!』

『それは私が貴様と常に共に居たからだ。まあ、私は一時期貴様から離れていたがな…』

『ぐつーつーかテメーは誰なんだよー?いい加減姿を見せやがれ!』

『良いだろ。と、言つよつ私はすでにお前の目の前に居るがな』

はあ？俺は何気無く首を上に向ける。

先ず目に付いたのは真紅色のルビーの様な眼。体は磨き抜かれた黒曜石を連想する。そして背に体のサイズは有りつかと言つ翼を持ちし…竜…

俺は「コイツを知っている。世界中の誰よりもこの黒竜を知っている。
なんたってコイツは俺の……

『レッド…アイズ…?』

『ああ、真紅眼の黒竜。城之内克也。貴様のモンスターだ』

『なんで…お前が…?』

『それは貴様が変わった…いや違うな、悩んでいたからだ』

『俺が…悩んでた…?』

『すっかり忘れていたらしいが貴様は自分の成長に限界を感じはじめていた』

『そう言えどもそうだ。ここ最近色々大変だったから忘れてた。俺は中々上がらない自分の実力に嫌気が差していたんだ』

『そうだ。貴様はそんな不安を払拭させるためにがむしゃらにデュエルを続けていた。そしてデュエルの本質である楽しむ気持ちすら貴様は忘れていた』

返事が出来ない。

『仲間も忘れるほど視野は狭まり、自分を不安にするデュエルを、不安にならないために続けた。しかしお前は変われなかつた。次第に俺達の間に合つた繋がりすら蔑ろにした』

レッドアイズの言葉が否定できない。その言葉の一言一言が毒の様に俺と言つ個を犯し始める。

『俺達はまるでテュエルに呪われているかの様だつたからな……知らんかも知れんが貴様の妹も武藤遊戯、本田ヒロト、真崎杏子、皆貴様を心配していた。勿論俺達もだ』

『遊戯……本田……杏子……静香……』

そうだ。俺はこんなダチを持つていた。それは分かつっていたのに……

『俺達が貴様と話そうと決断したのもそれのせいだ。あまりに見ていられなくなつた』

『俺は……』

『デュエルに……呪われて……いた……』

『どうだ、自覚したか』

そうだ。俺は最初の気持ちを忘れて……いた。いつの間にかアテムや遊戯に追いつくのに必死になりすぎて……仲間もカードも蔑ろにした。

『憧れは使命感に変わり、使命感は度を過ぎれば呪いに姿を変える。貴様はアテムや遊戯の背中に憧れ……それが呪いまで昇華させた。しかし、貴様は大事な物を……貴様が前に見えていたものを見失つた』

『……』

『俺達はそんなお前を見たくなかつた。だから異世界の扉を開けた。』

『デュエルの無い、いや、デュエルが全てでない世界を指した。貴様を『デュエル』と言つ鎌からはずしたかった』

確かに……この世界に『デュエル』はなかつた。

『だから聞きたい。貴様はこの世界が退屈か？』

『退屈……違う。むしろ居心地は良かつた……。『デュエル』は忘れていた……それはなんでだ？』

『まあ、その答えは保留だ。今はあのセシリアって奴の友達になるんだる』

『保留つて……』

確かにこの答えは今は出せない。俺じゃ出しきれない……

『それじゃ本題だ。ビックリな真実なんだが、貴様の『IS』は今だ正式に稼働してすらない』

『はあ？俺の『IS』が稼働してない！？』

『あれは俺達の力を『IS』に写し出す力を有している。しかし、今まで写し出す対象の俺達が力をほとんど失っていたんだ。想像以上に異世界への転移に魔力を持つていかれたからな、そして今さつき、やっと全員が写し出されるぐらいには力を回復した』

『俺は貴様と会話出来るぐらいは力が回復したんだがな。レッドアイズは平淡と言つ。』

『それじゃ……』

『ああ、城之内。共に行くぞー!』

なんて言つか……嬉しいな

『ああ！行くぞレッドアイズ！！』

『マイツ!』と一緒に鬪えるのが…

確かに俺の心は『テュエルに囚われていたかもしねえ。今は『テュエルから解放されているのかもしねえ。だけど…今は関係ない。俺は俺なんだ。だから…

「今は考えるより…行動するだーー！」

世界に光が降り注いだ…

4 戦闘開始と決闘者の呪い（後書き）

千冬様ヒロイン計画

最近、千冬様に城之内を意識させるかさせまいか考えています。このまま主従関係を継続するか。それともシンテレ師匠化させるか悩んでいます。

一応ヒロインはラウラの予定です。銀髪眼帯は正義です。異論は認めん（キリイ）

次回は覚醒したレッドアイズと共に城之内はセシリアに挑む。解禁された武装で試合の流れを断ち切るも、代表候補生の実力に追い詰められる。

次回！蒼い雲 vs 黒き龍

デュエルスタンバイ！！

原作風次回予告でした～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5836x/>

I S・真の決闘者の闘い

2011年11月23日14時51分発行